

CONTENTS

- | | | | |
|---|-------------------------|---|-----------------------------------|
| 1 | ●令和7（2025）年度のFD活動を振り返って | 4 | ●令和6（2024）年度 卒業時学修成果・満足度調査結果概要 |
| 2 | ●特色ある学部取り組み～経済学部～ | 5 | ●令和7（2025）年度 全学FD研修実施一覧 |
| 3 | ●FD研修参加報告 | 6 | ●令和7（2025）年度 全学FD活動報告 |

令和7（2025）年度のFD活動を振り返って

FD担当副学長 永井 智

立正大学では、「教育研究の「質」の更なる高度化」を2025年度のテーマとして、2026年3月に「生成AI時代の教え方—学びを担保しつつ、良くするアイデア—」を実施しました。生成AIの急速な普及は、大学教育そのものの在り方にも大きな問いを投げかけています。本学としても、生成AIを教育の中でどのように位置づけ、どのように活用していくべきかを考える必要があると認識しています。

研修では、千葉大学高等教育センターの田川翔先生に講師としてお越しいただき、大変密度の濃いお話をさせていただきました。AIの基本的な仕組みの説明に始まり、そもそも大学教育において何を「学び」として重視すべきか、また、その中でAIをどのように活用すべきかという根本的な問いにまで立ち返りながら、非常に多くのご示唆を頂きました。

研修中に行われたアンケートでは、AIが「学生の学びを促進する」と回答した先生と、「学生の学びを阻害する」と回答した先生が同数であったことも印象的でした。多くの革新的技術がそうであるように、AIにも明らかに利点と課題の両面があります。だからこそ、大学としては、いかにして学生の学びに資する方向へAIを活用していくかが問われているのだと思います。

研修内容の中で特に印象的であったのは、現時点のAIは、情報の理解、応用、分析といった活動には強みを持つ一方で、より高次の活動である評価や創造についてはなお限界がある、そして、AIを適切に活用することによって、学生自身がこの評価や創造といったより高次の学びに向かうための足場を整えることができるのではないか、という新しい学習の可能性の提示で

した。そして、学生が深い学びに到達するためには、やはり理解・応用・分析といった基礎的な学習過程に粘り強く取り組み、土台となる力を十分に身につけることが不可欠です。学修到達目標を改めて見直し、それに即した評価方法や授業設計を構築することが重要であるという点は、本学の今後の教育実践を考えるうえで大きな示唆となりました。

こうした話題もさることながら、本研修では、文学部の伊澤高志先生による授業での試行錯誤のご紹介や、参加された教員同士のディスカッションも大変有意義であったと感じております。現場で生じている戸惑いや工夫、具体的な実践例が率直に共有され、教員同士が互いの経験から学び合おうとする姿勢が強く感じられました。このように実践知を共有しながら、教員が主体となって教育の向上に取り組む活動こそ、まさにFDと言えるものであったと思います。

研修動画はTeams上で視聴可能となっておりますので、当日参加できなかった先生方におかれましても、ぜひご覧いただければ幸いです。

本学では、2026年度以降も継続的にFD研修会を実施していく予定です。今後も大学全体で実践を共有しながら、学生の学びをより豊かなものにしていくことを期待しています。



※立正大学学内関係者のみ閲覧可能です。

特色ある学部の取り組み ～経済学部～

経済学部 准教授 慶田 昌之

特別講座「日経で学ぶビジネススキル・アクションラーニング」

経済学部では、学生が主体的に行動し、社会で通用する実践的なスキルを習得することを目的として、2年生以上を対象とした特別講座「日経で学ぶビジネススキル・アクションラーニング」を開講している。本講座は、日本経済新聞社とのコラボ授業として、日本経済新聞社で記者やデスクとして30年以上のキャリアを持つ後藤未知夫氏を外部講師として招き、文章のプロの視点から直接指導を受ける点に大きな特色がある。

1. 導入と基礎トレーニング

近年、就職活動の早期化が進むなか、学生には自らアクションを起こして力をつけることが求められている。本授業では、まず『日本経済新聞 電子版』を活用し、経済用語の調査や国際ニュースの要約、「読み手ファースト」の視点による論理的な文章作成術など、ビジネスの基礎となるインプットとアウトプットの訓練を積む。なお、受講生は学部負担により電子版を無料で利用できる環境が整えられている。

2. 実践的なアクションラーニング：企業取材と新聞制作

授業の核となるのは、グループ単位での新聞制作である。学生たちは「キャップ（リーダー）」を中心とした組織を編成し、以下のステップを自律的に遂行する。

* テーマ設定とアポ取り：インバウンドや金融、小売など多岐にわたるテーマから取材先企業を選定する。学生自身が企業へ電話やメールで直接アポイントメ

ントを取るプロセスは、ビジネスパーソンとの対話に慣れていない学生にとって大きな壁となるが、これを乗り越えることで主体性と自信を醸成する。

* 現場取材と執筆：実際に企業へ赴き（またはオンラインで）インタビューを行い、下調べでは得られない「生の声」を引き出す。得られた膨大な情報を整理し、専用ソフトを用いて本物さながらの新聞紙面へと構成していく。

3. 教育的成果と就職活動への波及効果

本講座の取り組みは、単なるスキルの習得に留まらず、学生のキャリア形成に直結している。

授業内で行われるエントリーシート（ES）の個別添削は、人事担当者に響く文章表現の習得に寄与している。受講生からは、「企業取材で培った『深く調べる力』が面接での質の高い逆質問に繋がった」「アポ取りの経験で積極性が増し、第一志望の内定を獲得できた」といった報告が相次いでいる。

このように、記者の仕事を実感しながら「自分で考え、議論し、対話して成果を出す」プロセスは、コロナ禍で制限されていた「人との交流」や「自発的な行動」を補い、社会人としての強力な武器となっている。経済学部では、今後もこうした実践的な学びを通じて、学生一人ひとりの成長と学修成果の可視化を推進していく方針である。



令和8年3月16日 生成AI時代の教え方 ～学びを担保しつつ、良くするアイデア～

2025年度のFD研修会として、千葉大学の田川翔氏による「生成AI時代の教え方」と題した講演をお願いいたしました。生成AIを単なるツールとしてではなく、学生にとっての新しい「環境」として捉え、「学びを担保しつつ、さらに良くする」ための具体的な指針が、前半の「守り（制限）」と後半の「攻め（積極活用）」の二部構成で講演していただきました。

1. 生成AIの仕組みと教育への影響

まず、教員がAIと向き合う大前提として、大規模言語モデル（LLM）の本質を理解する必要があります。AIは「ルール集」ではなく「統計的な重みの塊」であり、「次に来るもっともらしい単語（トークン）を予測する作業」を繰り返しています。この確率的な仕組みゆえに、事実とは異なる情報を生成する「ハルシネーション（もっともらしい嘘）」は構造上避けられないことに注意が必要です。

2. 「守り」の戦略：ポリシー策定と学問的誠実性

教育現場における「守り」として、AI利用の透明性を確保し、学びの質を損なわないためのルール作りが必要であり、以下のような点が注意すべき点として挙げられました。

- (1) ポリシーの策定と対話：大学全体、および科目レベルで明確な指針を示す必要があります。単に禁止するのではなく、「なぜこの科目でAIを使って良いのか、あるいはダメなのか」という理由を学生と対話し、価値観を共有することが重要です。
- (2) シラバスへの明記：具体的な使用条件、ハルシネーションへの警告、引用の表記ルール、および最終成果物への自己責任の所在を明文化します。
- (3) AI検出ツールの限界：文部科学省も指摘するように、検出ツールは誤検知による「冤罪」のリスクがあり、過信は禁物です。「ツールで取り締まる」のではなく「課題の設計自体を見直す」ことが現実的な解決策として提示されています。
- (4) アカデミック・インテグリティ：捏造、改ざん、盗用といった不正行為は、AI利用の有無にかかわらず厳禁であることを再認識させる必要があります。

3. 「攻め」の戦略：逆向き設計による学びのアップデート

AI時代の「攻め」の教育とは、AIを「学びを深める伴走者」として位置づけ、授業を再構築することを考えるべきと指摘されました。以下の点は再構築の視点となると考えます。

- (1) 逆向き設計（Backward Design）：学習目標（何ができるようになるか）を起点に、評価方法、学習内容の順で設計します。
- (2) 高次思考へのシフト：ブルームの教育目標分類に基づき、AIが得意とする「記憶」や「理解」といった低次思考の課題はAIに任せ、「分析」「評価」「創造」といった高次思考を求める課題へとシフトさせます。
- (3) 個別最適なチューターとしての活用：AIを「答えを教える道具」ではなく、学生の理解度に合わせてヒントを出し、批判的思考を促す「パーソナル・チューター」として活用します。自己説明や実力テストといった学習効果の高い手法をAIで支援することで、個別の学びをスケールさせることが可能です。

4. 教育のパラダイムシフトと教員の役割

最後に、AIがもたらす教育の根本的な変化について言及されました。

- (1) 「理論」先行から「経験」先行へ：まずAIと共に実践し、「生産的な失敗」から自分に足りない知識に気づく学習サイクルへの転換です。
- (2) 「知識伝達」から「場の創造」へ：知識を与える専門家から、学生の対話や内省を促すファシリテーターへと教員の役割が変化します。
- (3) 「人間固有の力」の育成：より良い問いを立てる力、AIの出力を批判的に評価・編集する力、そして最終的な選択に責任を持つ力を育てることが、これからの教育の核心となります。

教員自身がまずAIを触り、「既存の課題をAIに解かせてみる」ことから始める改善フローを通じて、誰でも自分の力を最大限に解放する教育環境の実現を目指していく必要があります。田川先生の講演はツールを使って聞き手のフィードバックを受けながら進めていました。最初はAIに対して否定的な意見が多かったように思いましたが、最後の方ではだんだん肯定的になり、多くの先生が教育に積極的に利用する案を提案していたことが、非常に印象的でした。

令和6（2024）年度 卒業時学修成果・満足度調査結果概要

立正大学では、授業方法・内容の改善、学生支援の拡充や施設・設備の充実を踏むことを目的として、4年間本学で学び卒業する学生を対象とした、卒業時学修成果・満足度調査を実施している。

立正大学で学んだ満足度は「大変満足」「満足」を合わせた満足率が81.7%（2023年度は66.3%）であり、高い満足度であった。詳細をみると、満足度の詳細をみると、「ゼミナールや演習、フィールドワーク等の授業（80.3%、2023年度79.0%）」「講義形式の授業（78.4%、2023年度75.2%）」「図書館（77.7%、2023年度75.9%）」など学習面は7割を超える満足率となっており、かつ、前年度から微増しており、本学の強みといえる。

立正大学で身についた能力に関する成長実感について、「とても身についた」「身についた」を合わせた達成率をみると、「外国語能力と国際感覚（41.5%）」を除き、5割以上の成長実感を有していた。なかでも成長実感の高い能力は、「多様性を受容し、他者と協調・協働しようとする態度（81.3%、2023年度79.8%）」「専攻分野における専門的知識・技能（79.3%、2023年度77.6%）」「人間・社会・地球についての一般的な教養（79.3%、2023年度*%）」「課題を発見し、必要な情報を収集、分析、整理して解決に導く能力（78.1%、2023年度75.0%）」であった。成長実感があまり高くなかった能力は、「外国語能力と国際感覚（41.5%、2023年度42.3%）」「立正大学の建学の精神に関する理解（56.3%、

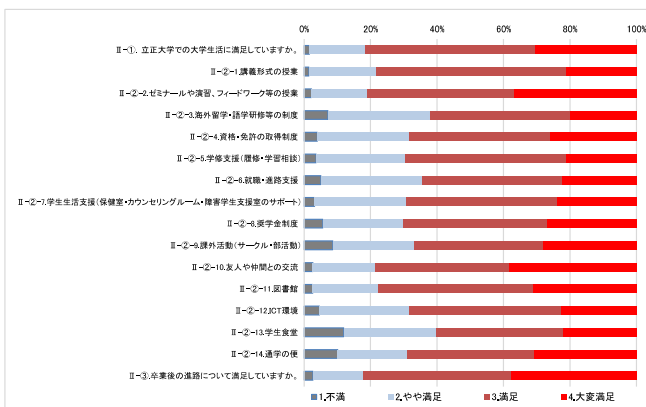
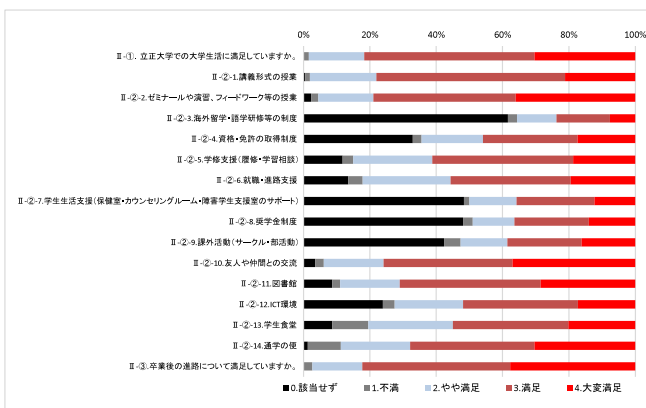
2023年度54.5%）」「ITスキルと情報リテラシー（62.5%、2023年度59.8%）」となっていた。

2024年度の卒業生アンケートを通して見えてきたことは、立正大学全体に対する卒業生の満足度はおおむね高い点である。特にゼミナールや演習フィールドワーク等の Active Learning を積極的かつ多様に取り入れた実践的な学習と講義形式の授業においては8割近い満足度が示された。また、進路に対する満足度も8割強と高い点も大きな特徴であった。一方で、学修に関する支援や進路や学生生活支援については満足度向上に向けた一層の取り組みが求められる。

4年間で身に付けたこととされる成長実感の高い能力は、前年度と同様に「多様性を受容し、他者と協調・協働しようとする態度」「専攻分野における専門的知識・技能」「課題を発見し、必要な情報を収集、分析、整理して解決に導く能力」であり、今年度「専攻分野における専門的知識・技能」も加わった。このことは、時代に即した柔軟性や他者を重んじる態度、そして自らの専門分野を生かし、状況を整理し問題解決する能力が育っているといえる。

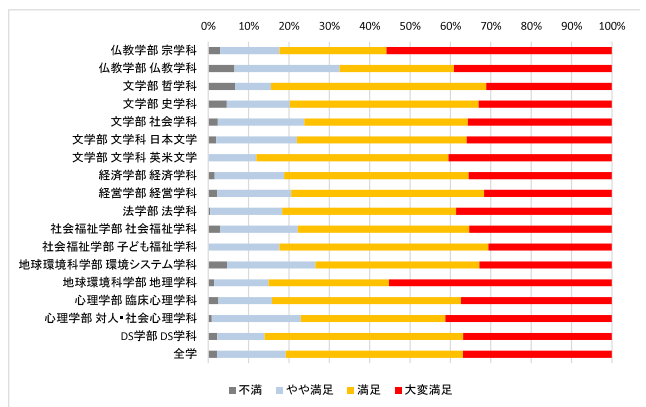
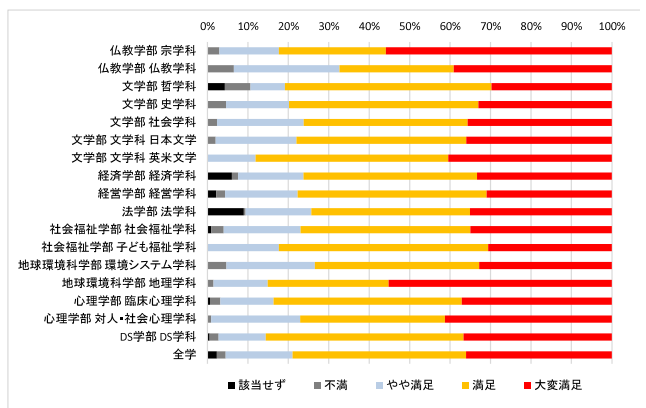
しかし、「外国語能力と国際感覚」や「ITスキルと情報リテラシー」、「立正大学の建学の精神に関する理解」は前年度に引き続き相対的に低い。このことを本学の改善点と捉え、これらの能力をどう高めるかについては検討することが求められる。

立正大学で学んだ満足度についてお答えください



立正大学で学んだ満足度についてお答えください

Ⅱ-2-2. ゼミナールや演習、フィールドワーク等の授業



令和7（2025）年度 全学FD 研修実施一覧

| 開催日 | 主催 | 内容 | 開催形態 | 教職員参加者数 |
|----------|----------|---|-------------|---------|
| 7月17日(木) | 教育開発センター | 研修名：令和7年度外部アセスメント (GPS-Academic 1・3年生) 報告会 概要：令和4（2022）年から実施している、外部アセスメント GPS-Academic の結果について、「問題解決力」、「学生意識調査」を中心に分析結果について、ベネッセi-キャリアの担当者より報告いただいた。さらに、令和6年度に点検見直しを行った、ディプロマ・ポリシーの検証への活用事例や、学修成果の可視化への活用方法についても言及した。 | オンライン | 42名 |
| 9月1日(月) | 高等教育研究機構 | 研修名：高等教育研究機構集中会議 概要：内部質保証システムを再構築するにあたり、教学マネジメントの中核となる機構会議の役割について認識を共有した。また、新たな自己点検・評価シートを用いて、大学基準4「教育・学習」を対象とした点検・評価を執行し、運用課題や作業状況について情報を共有した。 | 対面 | 34名 |
| 3月10日(火) | 障害学生支援室 | 研修名：障害学生支援室の現状と所属学部並びに関係部署との連携について 概要：障害学生支援室開室から現在に至るまでの動向をたどりつつ、改めて障害学生支援マニュアルをもとに合理的配慮の決定過程について確認しつつ、学内における連携の在り方について考えた。 | オンライン | 18名 |
| 3月16日(月) | 教育開発センター | 研修名：生成AI時代の教え方～学びを担保しつつ、良くするアイデア～ 概要：千葉大学高等教育センター田川翔先生より、「生成AIで学を損なわない」、「生成AIで学びをさらに良くする」の2つのテーマに沿って、大学教育では生成AIとどのようにかわっていけばよいか講演をいただいた。また、Slidoを用いたアンケート調査、グループワークなどのワークショップ形式で教職員間での生成AIに関する様々な意見が共有された。 | 対面 オンライン | 73名 |

〈3月16日に実施された全学FD研修会〉

（教職員参加者数は、令和8年3月31日現在）

生成AI時代の教え方 何が一番伝えたいのか

| | | |
|---|--|---|
| <p>授業での考え方の例</p> <p>達成目標： 何が出来るようになるのか</p> <p>学生現状</p> | <p>目的： どこに向かうのか (授業の存在価値)</p> <p>設計(課題など)： どのように教えるのか</p> <p>設計を損なう形で、AIを使わない！ → 教員が身につけて欲しいと考えるから、意図的に学生の努力を期待している点</p> | <p>学修後の状態</p> <p>評価： どのように測るのか</p> |
|---|--|---|

AI = RPGの場所ジャンプ機能にもなる単にジャンプし続けると経験値がたまるらずに、自分が使いこなせなくなってしまう

生成AI時代の教え方 ワーク③ 生成AIを設計に機転

ワーク お手元のA4のワークシート/slidoにご記入下さい。

手順1：(1人で2分)
AIを使うことで面白くなりそうな課題/ワークをアイデア出して下さい。壁打ちに生成AIを使用しても問題ございません。

手順2：(4人で12分)
面白い課題をグループで1つ、深めてデザインしてみてください。最も面白かったアイデア1つを、全員が1個ずつ共有し、その後は一人の先生アイデアを発展させても、全員で組み合わせても構いません。AIを組み込みながら、より高い学習効果を期待できる方法を検討して下さい。

手順3：(全員で4分・ワーク中、記入可能です。前手順でも順次 slidoに記入下さい)
気付いた点・決まったアイデアをslidoで会場全体へ簡潔に共有して下さい。

このワークのポイント
案外簡単に変更できること / 目的と成果からかんがえること



講師：千葉大学 田川 翔 助教

図 3月16日実施FD研修会資料

令和7（2025）年度 全学FD活動報告

〈全学FD研修以外の主な活動内容〉

| | |
|------------------|---|
| 2025年3月21日～4月8日 | 令和7年度 GPS-Academic（1年生・3年生）実施 ※4/30まで延長 |
| 2025年6月23日～7月5日 | 令和7年度 第1期授業アンケート実施 |
| 2025年12月1日～13日 | 令和7年度 第2期授業アンケート実施 |
| 2025年12月1日～1月31日 | 令和7年度 GPS-Academic（2年生）実施 ※独自設問で在学生学修成果・満足度調査と全国学生調査を統合して実施 ※2/27まで延長 |
| 2025年12月1日～1月31日 | 令和7年度 卒業時学修成果・満足度調査実施 全国学生調査（4年生）実施 ※3/31まで延長 |

編集後記

FD ニュースレター第34号をお届けいたします。教育開発センター運営委員会FD部会長である私の作業が遅かったため、2025年度中に出す予定だったものが年度を超えて発行することになりました。遅くなりましたことをお詫び申し上げます。執筆を頂いた先生方には、誠にありがとうございました。2025年度は、教育開発センターにおいても生成AIに対する対応を検討してまいりました。FD研修会についても生成AIに関するテーマで開催いたしました。講演していただいた田川先生の素晴らしいファシリテーションのおかげ

で盛況な研修会となりました。生成AIに関する状況は、年々変化しておりますので、今後もFDの大きなテーマとなると考えております。今後も研修会等で、この問題を取り上げたいと考えております。FDニュースレターにおいても、生成AIの問題を含めて、有意義な情報を発信していきたいと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

（教育開発センターFD部会長 経済学部 准教授
慶田 昌之）